

脱北者アーティスト
ソン・ビョクの話題の作品

North Korean artist turns talents on repressive regime

元将軍様の画家の意外なパンチ力

アート 北朝鮮の体制派画家だったソン・ビョクが放つ
皮肉でユーモラスでリアルな作品が醸し出す不思議な魅力

フワリと舞い上がる白いドレスをギリギリのところを抑えるポーズ——誰もが知っているマリリン・モンローの映画『7年目の浮気』のワンシーンだ。ところが視線を上に移すと、サングラスをかけてニカッと微笑むのは北朝鮮の将軍様、金正日。足元には何匹もの金魚が跳びはねている。「服を脱いで！」と題されたこの作品の作者は、北朝鮮出身の画家ソン・ビョク(42)。02年以降は韓国で活動を続けている。今年1月には、ソウルで初めての展覧会「フォーエバー・フリーダム(永遠の自由)」を開いた。

脱北前のソンは、体制を賛美するプロパガンダ・アーティストとして、北朝鮮建国の父・金日成の肖像画や、勇ましい労働者や農夫のポスターを描いていた。しかし韓国に来てからは、抑圧的な体制

と金正日を批判する作品を積極的に世に送り出している。

ソンに言わせれば、モンローという自由を象徴する大スターも、金というスターリン主義者も、明らかに何かを大衆から隠そうとしている。そして誰もが見えそうで見えないその「中身」に注目している——そこに魅力を感じて描いたのが「服を脱いで！」だという。さらにソンは、リーゼント姿で赤ワインのグラスを傾げる金の胸に、大きなハートマークと白いハトを描いた絵を見せて言った。「金には戦争のことばかり考えるのはやめると言いたい。それから少しは優しい心を持ち、民衆に自由を与えるべきだ」

趣味で絵を始めたソンだが、その才能はすぐに朝鮮労働党の目に留まり、お抱え画家として雇われることになった。首都・平壤の南



プロパガンダ 北朝鮮時代に描いたポスター「自立した人間」

SONG BYEOK, JULY 2011



自由な表現 脱北後に描いて話題を呼んだ「服を脱いで」

SONG BYEOK, 2010

1モアを混ぜ合わせたスタイルだ。「人が生まれて最初に手にする人権は自由であり、すべての人間には自由がある。世界中でそれが無いのは北朝鮮だけだ。私は作品を通じて世界と韓国の人々にメッセージを伝えたい」

脱北者のソンにとって、資本主義の韓国での生活では困難も多い。絵を描くために皿洗いや掃除係などのアルバイトもしなければいけない。それでもアトリエの家賃は5カ月滞納している。

だが韓国では驚くほど多くの人が北朝鮮に同情してくれるとソンは言う。しかし同時に、北朝鮮がテーマの作品では成功しないぞと、多くの人から警告されたという。けれどもソンは自分の経験を直視して、自分の故郷で起きていることに世界の注目を集めなくてはと考えている。展覧会のパンフレットに寄稿した弘益大学美術大学の韓陳濤学長によれば、ソンは「毎晩のように見る悪夢から逃れるために」作品を描いている。

ソウルでの展覧会の成功を受け、ソンはアメリカなど欧米諸国での展覧会開催にも意欲を見せている。「私は自由(の大切さ)と北朝鮮のことを伝え続けなくてはいい。そのために人生を賭けてきた」と、ソンは言う。「このチャンス逃すわけにはいかない」

セバスチャンストラノゾラロハルグスト

北朝鮮では言論の自由も、活動の自由も、集会の自由も、何もないじゃないか」
多くの脱北者と同じように、ソンが現状に疑問を持ち始めたのは、90年代半ばに北朝鮮の食糧配給制度が崩壊し、同時に壊滅的な飢饉が起きたときだ。
ソンの故郷の黄海北道でも多くの民衆が餓死し、生きて、生きる屍のような姿になった。ソンの家族も、コメのみ穀のスープと山で摘んだ野草を食べ、餓死寸前の状態で数年間持ちこたえた。
00年夏、ついにソンと父親は中国に出稼ぎに行くことに決めた。ところが中朝国境を流れる豆満江を歩いて渡ろうとしたとき、雨で増水した川に父親が流されてしまった。「川の半分くらいまで来た

ところで(父親とつながっていたはずの)ロープが緩んだ」と、ソンは振り返る。「父は『お前は行け、私のことは構うな』と3回言う」と、水に飲み込まれた」
やっこの思いで岸辺にたどりついたソンは、北朝鮮の国境警備隊員に父親を助けてくれるよう懇願した。「すると彼らは『なんでお前は生きているんだ。お前も死ねばよかったのに』と言って、私を殴った」。そのまま逮捕されたソンは、刑務所で7カ月間過酷な生活を送った。
このとき凍傷で指を1本失った。

絵は悪夢を克服する手段

恩赦を受けて釈放されると、ソンはあらためて中国に渡ることに成功。その1年後、あるビジネスマンの協力を得て韓国に入国する

ルートを確保し、仁川国際空港に降り立った。「それまで北朝鮮がうまくいっていないのはアメリカのせいだと思っていた。しかし父が死んだとき、それは違うのではないかと思いはじめた」